

雪国の植物 ユキツバキ25

ユキツバキの呼び名

石 沢 進

ユキツバキの呼び名は、誰が何時記録に残したか、その答えが明らかでない。和名は地方で呼んでいる名が「標準和名」として定着していることが多い。ユキツバキもその可能性が高い。しかしながら、何時、どの地方で呼ばれていたか、明らかでない。和名は、学名のように先取権の原理が適用されないので、命名者が誰であるか、あまりこだわることではなく、一般に呼ばれる名が定着して標準和名となっていることが多い。植物には地方名、俗名として多くの名前を持つ種があるが、最初に文献に残っている呼び名が標準和名になっているとは限らない。

学名の規約では、命名者自身が新種に記載文を付して公表した名前が適用されている。人から聞いた名前を記録することもあるが、最初に指摘した人と共同で命名者となるか、指摘した人に由来することを明示する。和名の場合はそのような命名上での規約はないので、誰が最初に呼び名として使ったか、それほど深く追求しているのは少ないようである。

ユキツバキは最近注目されて広く知られるようになり、いろいろな観点から関心が持たれるている。その一つに「ユキツバキ」の呼び名があり、質問を受けたものの答えが出せずに保留したままである。

「ユキツバキ」の名の経緯を高橋与平氏が「津川高等学校八十年記念誌」に記録しているという。そのことを赤城源三郎・古澤達男(1984)が「にいがた歴史散歩」の中に指摘している。その一部を引用すると次のようである。「明治39年(1906)3月、津川高等学校の前身郡立農業補習学校の丸山忠次郎教頭は、教員一名と麒麟山へ登り、椿の一株を見て花の全容や雌雄薬が異なることに気がついた。見本を東大の理学物助手をしていた牧野富太郎に送ると、牧野はさっそく『ユキツバキ』と命名したという。」

上記の情報をもとに1994年10月17日の「新潟日報夕刊(ユキツバキ 丈余の雪に耐えて咲く『県木』)記事では、[植物学者・牧野博士によって田舎ツバキはいち早くユキツバキと命名されていたわけだ」と記録している。

しかし、牧野富太郎氏が記した「遺稿集」(我が思い出(1958年刊行:45頁)にユキツバキの記事があり、「ユキツバキ」は雪椿で越後山地の土言である」と記してあるという(奥山1968)。その原稿は何時書かれたか不明であるという。また、ユキツバキの和名が植物分類学上の文献に初めて記載されたのは、1936年8月、柳田由蔵氏の報告で

ある。同氏は *Camellia japonica* var. *Hajime-Tanakai* Yanagitaの学名にユキツバキ、ハイツバキの和名を付して公表している(林学会雑誌18:628頁)。柳田氏がユキツバキの和名を記録したのは同氏が多くの林学関係者との交流があり、公表以前に北陸あるいは東北のユキツバキの自生地ですでにその名前を使っていた可能性があることを津山(1968)が指摘している。なお、ユキツバキの和名は津山(1947)がその詳細な記載文と共に、分布域も明らかにその名を採用して発表している。その結果、越後自生のつばきはユキツバキの呼び名が統一されて、その後の文献では、広くこの和名が定着したとみることができよう。

伊藤忠好氏は『和名「ユキツバキ(雪椿)」命名者の検証』と題してこれまでの和名の命名者が誰か、詳細に調査されてまとめている(2000年、新潟駒場会誌 第29号、新潟駒場会)。その結びに『麒麟山産のツバキが明治時代に牧野博士のもとに送られ「雪椿」の和名をつけていただいたたのは間違いなからう』と記録している。

以上このような報告から和名「ユキツバキ」の名付けは牧野富太郎氏である、とするには問題がある。同氏の遺稿集に雪椿は「越後山地の土言である」ことから名付け親はもっと古くて、誰が何処でユキツバキと呼ぶようになったか明らかでない。

学名は1936年5月に杉本順一の命名した *Camellia japonica* var. *decumbens* Sugimoto(和名 オクツバキ)が最初であり(日本樹木総検索表:252頁)、変種の分類群としてあつかう場合は、1936年8月柳田氏の報告よりも3ヶ月早いので、杉本氏の学名が有効名となり、柳田氏の学名はそのシノニム(同物異名)となる。ユキツバキを亜種と見る意見では、*Camellia japonica* subsp. *rusticana* (Honda) Kitamura(北村1950)、独立種とする意見では *Camellia rusticana* Honda(本田1947)の学名が使われる。

ユキツバキの花が暖地のヤブツバキのそれと形態的に違うという指摘は1939年6月10日に鳥羽源蔵氏が採集した標本のラベルの手記があり、それが最も古いという。同氏が岩手県胆沢郡若柳村(猿岩)で花のついた枝の標本を採集し、それに「幹枝共に横臥匍匐、雄薬分生、黄色、寒き地方なり、野生」との手記があるという(奥山1968)。さらに、ユキツバキの最も古い標本は1884年(明治17年)7月24日に矢田部良吉教授、村松任三助教授一行が富山県の立山下で採集したものであるという(奥山1968)。植物分

類学者の矢田部氏一行がヤブツバキとは違うツバキであると、認識して採集されたかどうかわからない。1906年に前記丸山忠次郎氏が関東のツバキと花の構造が違うと指摘したのが、ユキツバキの最初の発見者であるという可能性もある。しかしながら、越後のある地方で、古くからすでに形態の違いに気づき「ユキツバキ」と呼んでいた可能性も否定ができない。

つまり、古来からツバキとは形が違っていることに気づき、ユキツバキと命名したのは誰か、どの地方でそのように呼ぶようになったか、明らかな資料が必要に思われる。

県内のユキツバキの地方の呼び名に松之山地方では「ハッコ」と呼んでいたという(高橋 1986)。津南地方も「ハッポ」と呼んでいたという(津南町教育委員会 1994)。また、小千谷市塩谷では「ホッパ」と呼んでいるという(関省吾氏談)。それらの地方の呼び名の違いや意味にも興味がある。それにしても、それぞれの呼び名の最初は誰であったか確かめるのは困難であろう。

赤城源三郎・古澤達男(1984)

図解にいがた歴史散歩(五泉・中蒲原・東蒲原)

新潟日報事業社

本田正次(1947) 生物界 1(3):100.

本田正次(1950) その後のサルイワツバキ

植物分類地理 12(4):176-178.

北村四郎(1950) 植物分類地理 14:56-63.

奥山春季(1968) ユキツバキ採集の思い出 京都園芸

第58(椿第九号特):15-17.

高橋八十八(1986) 雪国の四季と草木と人間と(山村の博物誌)

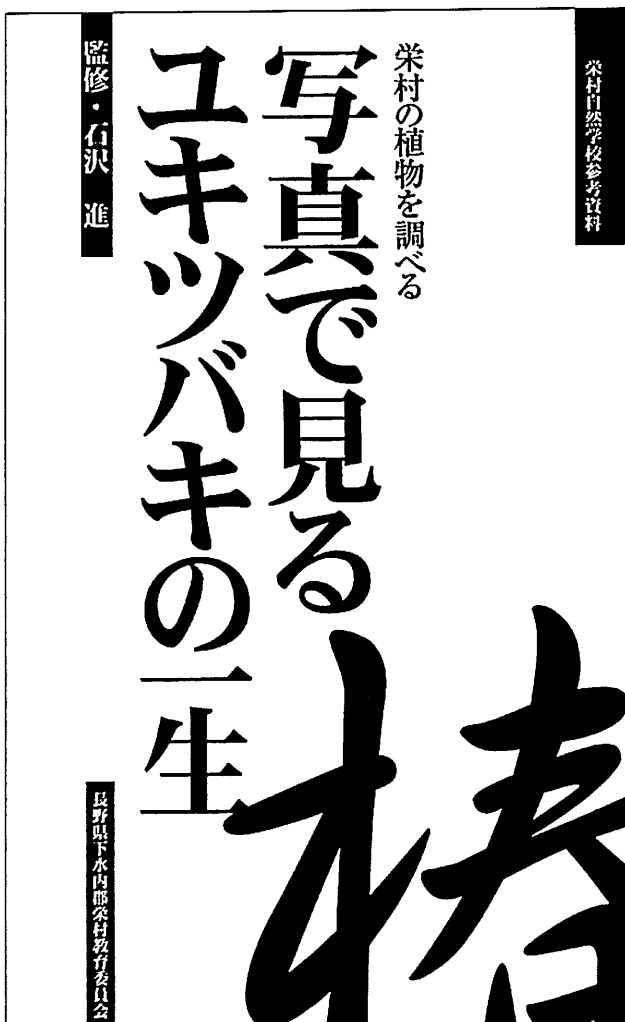
津南町教育委員会(1994) 津南町の自然 植物編 493pp
[草木の呼び名:40p]

津山 尚(1949) ユキツバキに就て

植物研究雑誌 24(1-2):97-100.

津山 尚(1968) Taxonomy and Nomenclature of the wild *Camellia japonica* Camellias of Japan. 45-47.(野生ツバキの分類と命名) 日本の椿(和文の部) 19-22.

図書紹介 下記の本(64頁)を出版しました。



目次

はじめに

1. 春、いつころ姿をみせるか	1
2. 春、いつころ花を咲かせるか	4
3. 花は株による違いがあるか	7
4. 花のつくりはどうなっているか	10
5. 芽はいつ開きはじめ、いつ終わるか	13
6. 次の年の葉の芽やつぼみはいつできはじめるか	16
7. 秋、果実はいつ実るか	19
8. 種子のつくりはどうなっているか	22
9. ふえていくしくみはどうなっているか	25
10. どのような林の中に生育しているか	27
11. 樹の大きさはどのくらい高くなるか	31
12. どのような植物と一緒に生えているか	34
13. どのように冬越しをしているか	36
14. 栄村でなぜ分布の限界になっているか	39
15. その他、どのような性質を持っているか	41
16. 人の生活とどのようにかかわっているか	44
17. 天神様はなぜツバキを嫌ったか	50
栄村におけるユキツバキの一生	53
—設問に対する解答—	

長野県の栄村で撮影した写真を主に使って「ユキツバキの一生」の紹介です。前半51頁はカラー写真で紹介し、53頁以降に解説を加えています。

一部 1,500円で配布を予定しています。希望者は本協会の事務局に申し込んで下さい。